

企画展示

1

スポーツのチカラ

JICAの「スポーツと開発」事業を通して、
スポーツが世界にもたらす力について紹介します。

The Power of Sports

Through JICA's "Sports and Development" Project,
let us introduce the power that sports bring to the world.



© JICA/Kenshiro Imamura



© JICA/Ishikawa Masayoshi



© JICA/Jiro Nakahara



© JICA/Hikaru Nagatake



© JICA/Shinichi Kuno



© JICA/Shinichi Kuno

企画展示

2

JICAの「スポーツと開発」^{かいぱつ}

スポーツには、^{たいしやう}対象とする^{ちいき}地域や^{もくてき}目的に応じて
^{たやう}多様な^{とく}取り組みが^{かのう}可能な^{さまさま}様々な^{ちから}力があります。

JICAは、この^{ちから}力を^{せっきよくてき}積極的に^{かつよう}活用し、
^{なが}長きにわたり「^{かいぱつ}スポーツと^{じぎやう}開発」^{とく}事業に取り組んでいます。

JICA's "Sports and Development"

Sport has a variety of power that can be addressed in various ways, depending on the target area and purpose. JICA has been actively using this power to engage in "Sports and Development" Project for many years.

国連による持続可能な開発のための 2030アジェンダ宣言

「スポーツもまた、持続可能な開発における重要な鍵となるものである。我々は、スポーツが寛容性と尊厳を促進することによる、開発および平和への寄与、また、健康、教育、社会包摂的目標への貢献と同様、女性や若者、個人やコミュニティの能力強化に寄与することを認識する。」

2003年国連総会において「**教育を普及、健康を増進、平和を構築する手段**」としてのスポーツが決議されて以降、それまでは余暇活動や健康増進として理解されてきたスポーツが、人間開発や平和構築のための一つのアプローチとしてとらえられるようになりました。更に、2015年に採択された「**持続可能な開発のための2030アジェンダ**」においても、スポーツが持続可能な開発における重要な鍵となると明記されました。スポーツを取り巻く環境が世界的に大きく変化する中、JICAのスポーツ分野における取り組みを紹介するとともに、スポーツが世界にもたらすチカラについて紹介します。

スポーツの^{ちから}力

スポーツには人々を強く惹きつける力があります。それは楽しさや熱狂、感動をスポーツがもたらすが故であり、人々にとってスポーツは生きがいの一つにさえなります。また、スポーツには言語・文化・宗教など背景の違う多様な人々・地域をつなぐ力もあります。そのため、スポーツを通じて多様な人々が交流することで、相互理解や多様性を尊重する気持ちが醸成され、また、スポーツを通じて人間の闘争心が健全に昇華され、平和の実現へとつながっていくことができるのです。更に、スポーツにはさまざまな形態があり、「する」だけでなく「見る」、「支える」といった楽しみ方もあるため、対象とする地域や目的に応じて多様な取組が可能となっています。

^{なが}長きにわたる^{とりくみじっせき}取組実績

JICAは1965年の青年海外協力隊発足当初からスポーツ隊員の派遣を始め、累計約5,000名の体育・スポーツ隊員を各国に対して派遣しています(2020年3月末時点)。1990年代には障害者スポーツ分野の研修を、2000年代にはNGOと連携したスポーツ協力を開始するなど、世界に先んじて「スポーツと開発」に取り組んできた実績があります。特に、平和構築の分野では、スポーツが相互理解を促進するという特性に着目し、2002年の東ティモールにて独立直後の国民融和を目的とした独立記念スポーツ大会や、2016年から南スーダンにて民族融和を目的とした国民スポーツ大会をはじめとして積極的にスポーツを活用しています。

^{にんげん}人間の^{あんぜんほしょう}安全保障の^{じつげん}実現

JICAは「人間の安全保障」を実現するため、ひとりひとりの人間を中心に捉え、確実に届く協力を実践することを使命としています。スポーツの実践はすべての人にとって基本的権利であるとUNESCOが定めたスポーツに関する国際憲章に明記されています。誰もがスポーツにアクセスできるようにすることは、人間の生にとってかけがえのないことであり、すべての人の自由と可能性が拓がることに繋がります。そのため、「スポーツと開発」に取り組むことは、日本が提唱し、JICAもミッションとする「人間の安全保障」の実現にも寄与するものといえます。

企画展示

3

「スポーツと開発」事業と3つの柱

- JICAは、特に①スポーツへのアクセス向上、
②スポーツを通じた心身ともに健全な人材育成、
③スポーツを通じた社会包摂と平和の促進に取り組めます。

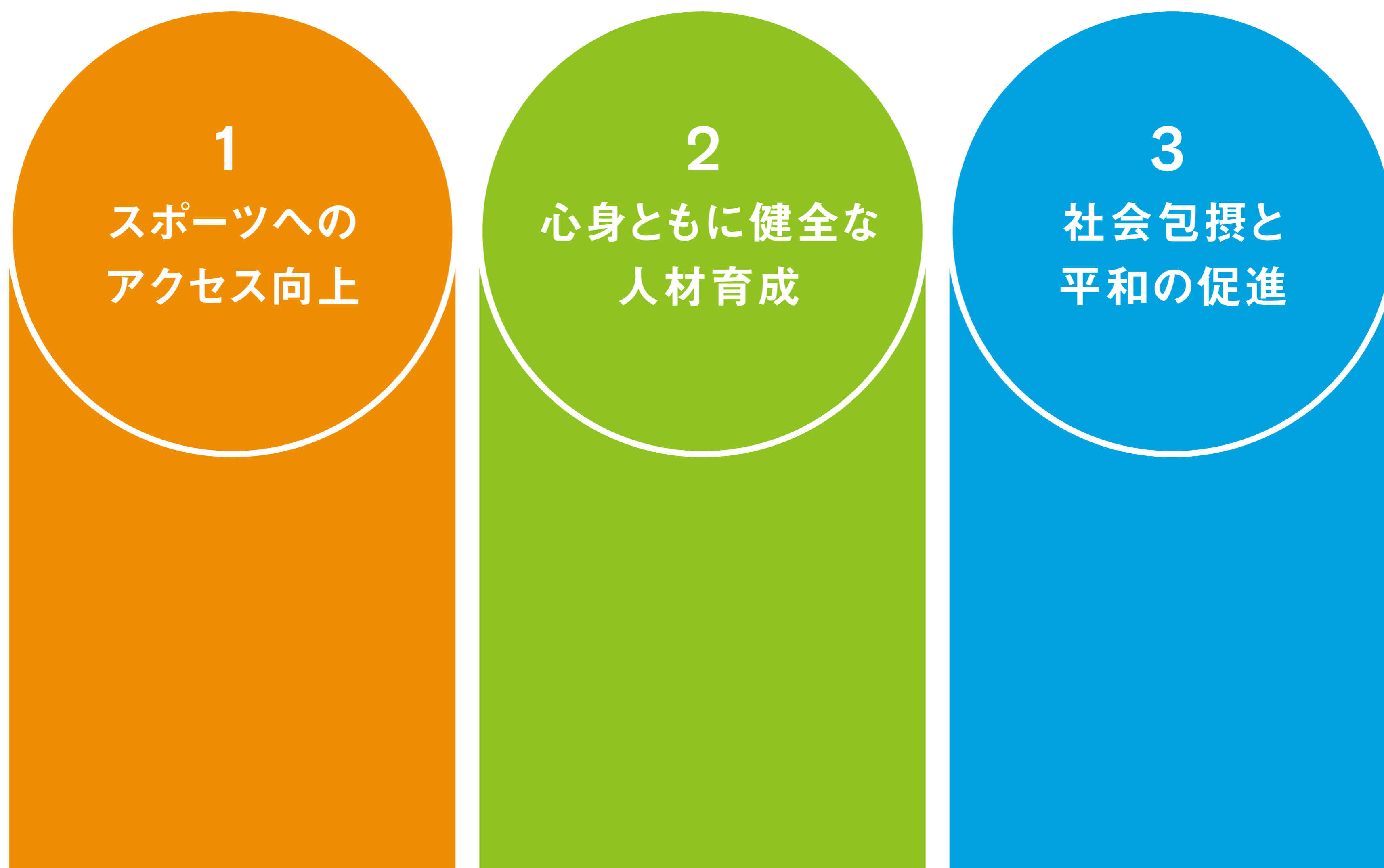
JICA's "Sports and Development" Project and Three Pillars

JICA works to 1)improve access to sports, 2)develop physically and mentally healthy human resources, and 3)promote social inclusion and peace, through sports.

「スポーツと開発」事業とは

JICAは、スポーツを手法として用い、直接的・間接的に開発途上国の個人や集団が持つ能力を高めたり、可能性を広げることで、人々の生活をより健康で豊かなものにする、開発課題解決のための効果的な手段のひとつとして、「スポーツと開発」事業に取り組んでいます。

JICA「スポーツと開発」3つの柱



1.スポーツへのアクセス向上

開発途上地域におけるスポーツへの参加機会を拡充し、開発途上国の人々に対してスポーツの価値や楽しさを届ける。

2.心身ともに健全な人材育成

幅広い年代の人々への運動機会の提供を通じて高齢者の体力維持や生活習慣病の予防・改善を促進する。また、学校体育や課外活動の整備を通じて開発途上国の次世代を担う人材を育成する。

3.社会包摂と平和の促進

障害者や女性の社会参画を促進する。また、誰もが公正かつ公平に参加できるスポーツ機会の整備を通じて多様な人々の交流を深め、相互理解を促進し、もって平和な社会の実現に寄与する。

企画展示

4

全世界に広がるJICAの「スポーツと開発」事業

JICAのスポーツを通じた協力実施国は、現在91カ国にも及びます。

Expanding JICA's "Sports and Development" Project throughout the World

JICA cooperates with as many as 91 countries through sports as of today.

JICAによる「スポーツと開発」分野への協力は、ボランティア事業、技術協力事業などさまざまなアプローチで実施されています。小・中学校で使用する教材や教員の指導書の開発、教員をはじめとする人材育成、スポーツを通じ

た平和促進、研修員の受け入れなど、スポーツを通じた取り組みは世界中で行われています。



欧州地域

- 協力実施国 **7カ国** (ポーランド、ハンガリーなど)
- JICA海外協力隊派遣人数 **145人**



中東地域

- 協力実施国 **6カ国** (シリア、モロッコなど)
- 運動会 **1カ国** (ヨルダン)
- JICA海外協力隊派遣人数 **443人**



アフリカ地域

- 協力実施国 **24カ国** (ジンバブエ、ザンビアなど)
- 運動会 **12カ国** (ウガンダ、エチオピアなど)
- JICA海外協力隊派遣人数 **805人**



アジア地域

- 協力実施国 **21カ国** (スリランカ、カンボジアなど)
- 運動会 **9カ国** (タイ、ネパールなど)
- JICA海外協力隊派遣人数 **1,362人**



大洋州地域

- 協力実施国 **10カ国** (ソロモン、サモアなど)
- 運動会 **2カ国** (フィジー、トンガ)
- JICA海外協力隊派遣人数 **247人**



中南米地域

- 協力実施国 **23カ国** (ブラジル、ペルーなど)
- 運動会 **7カ国** (エクアドル、パラグアイなど)
- JICA海外協力隊派遣人数 **1,409人**

協力実施国 JICAがスポーツ(ゲームや遊び、レクリエーションなどの要素も含む)を通じた協力を行っている各地域の国の数。
派遣人数 1965年に開始されたJICA海外協力隊の派遣累計人数(～2019年3月)

JICAが連携する主な団体(国内)

団体名	目的	実績(一例)
日本オリンピック委員会	スポーツが社会や人々のつながりに与える根源的な価値及び重要性を改めて認識し、スポーツの力や価値を最大限に活用することを目的とする。	● 山下会長による隊員向けセミナー ● JOC国際人養成アカデミーでのJICA講義 ● JOC/NF国際フォーラムでのJICA講義 など
日本サッカー協会(JFA)、Jリーグ	スポーツ(サッカー)を通じた国際協力の一層の発展を図り、ひいては開発途上地域の発展と世界の安定に貢献する。	● サッカーを通じた途上国の課題解決に向けた事業実施 ● 連携下にて87名のサッカー隊員(大学連携含む)を派遣 ● ホームゲーム時のイベント実施やJICAブース出展 ● サッカー用具の回収・提供 など
日本ラグビーフットボール協会(JRFU)	ラグビー隊員の派遣を通じて開発途上国における健全な青少年の育成に資するとともに本邦の人材も育成する。	● 連携に基づき65名のラグビー隊員を派遣 ● JICA職員が協会の国際協力部門員を務める など
読売巨人軍	相互に連携し、JICAが行う事業に巨人軍の知見・人材を活用し、途上国における野球の普及・振興を図るとともに、野球を通じた青少年の健全な育成を目的とする。	● 世界野球グローブ支援プロジェクト:約30か国以上に約5,000個のグローブを送付 ● 指導者派遣:原監督をはじめとして各国に派遣し野球教室を開催 など

企画展示

5

ボツワナ「井坪先生記念道場」

隊員の遺志をついだ道場からボツワナの柔道が大きく成長しています。

Improvement of Access to Sports

"SENSEI ITSUBO MEMORIAL DOJO", Republic of Botswana

Judo in Botswana has greatly grown from the dojo which followed the wish of one volunteer Mr. Itsubo.



隊員の指導を受け国際大会に出場するまで成長したガビン選手(上)



井坪先生と教え子たち



道場完成引き渡し式の様子



井坪先生と子どもたち



「SENSEI ITSUBO MEMORIAL DOJO」

日本から1万4千キロ離れたアフリカのボツワナ共和国では、日本の柔道が国民の間で人気となっています。

ボツワナでの柔道の普及には、一人の青年海外協力隊員の献身的な活動がありました。井坪圭佑隊員はボツワナでの柔道普及に大きな貢献を果たしましたが、任期中に不慮の事故で急逝されました。井坪隊員の遺志を継ぐ形で建設された道場「SENSEI ITSUBO MEMORIAL DOJO」(日本政府の草の根文化無償資金協力により建設)では、後輩隊員が今日もボツワナの青少年たちと共に汗を流しています。村上瑠希也隊員は、井坪隊員の後任

として派遣され、選手の育成に尽力しました。その結果、同国のガビン・モゴバ選手は2018年にアフリカ大会で優勝、2019年に世界選手権に出場しています。

井坪隊員の遺志は、隊員だけでなく、様々な組織にも引き継がれ、技術指導者の派遣や柔道着の支援などに結びつき、ボツワナ柔道は大きく成長しています。井坪隊員が撒いた種は着実にボツワナに柔の心として残り、引き継がれていきます。



企画展示

6

スリランカ「スリランカ野球場建設」

歴代野球選手による活動の成果が実り、
スリランカの野球を支援してきた人たちの夢であり、
希望であった国際規格の南アジア唯一の野球場が建設されました。

Improvement of Access to Sports

Construction of Japan-Sri Lanka Baseball Stadium, Sri Lanka

The first ever international stadium in South Asia, a dream and hope for those who have supported Sri Lanka's baseball, was constructed in Sri Lanka.



1



2



3



4



5

1.2.3.4. 日本で行われたスリランカU-18代表と神奈川県高校選抜チームとの交流試合 5. スリランカ初の野球場での神奈川県高校選抜チームとスリランカU-19代表との交流試合(3-0で日本勝利)

日本-スリランカ国交樹立60周年となる2012年12月23日、外務省による草の根文化無償資金協力とJICA寄付金により、スリランカに野球場が完成しました。スリランカ史上初、南アジアで唯一の国際試合を行うことが出来る国際規格の専用野球場です。完成記念式典後に、神奈川県高校選抜チームとスリランカU-19ナショナルチームとの交流試合が行われました。

クリケットとラグビーが盛んな国であるスリランカの野球に対する日本の協力は、2002年のJICA海外協力隊の派遣から始まり、広く野球の普及に尽力してきました。試合後には両チームの選手が合同でグラウンド整備を行うなど、野球を通じて協働と交流が見られました。この野球場の建設はスリランカ野球に関わってきたすべての人の夢であり、日本-スリランカ野球の架け橋として重要な役割を担っています。

スリランカと神奈川県は野球を通じて交流を行ってきました。2010年に世界大学野球選手権、2011年にU-18アジア選手権が神奈川県で行われた

際には、当時のJICA海外協力隊員が神奈川県出身だったこともあり、神奈川県の高校と練習試合等を実施しました。この交流を経て、新球場のオープニングマッチのため、神奈川県高校選抜チームがスリランカを訪問しました。2018年8月には、JICA海外協力隊が指導するスリランカ野球U-18代表チームが来日し、神奈川県高校選抜チームとの交流試合等を行いました。試合は投打で神奈川県高校選抜チームが圧倒する内容でしたが、ひたむきにプレーするスリランカU-18代表チームの姿勢は未来の飛躍を予感させました。



企画展示

7

JICA海外協力隊による
帰国後の継続した支援

小野祥子さん

アーティスティック
スイミング隊員(インドネシア)

JICA海外協力隊員も新型コロナウイルスによって
大きな制限を受けましたが、アイデアと情熱で継続した支援を行っています。

Improvement of Access to Sports

Continuous support after returning to Japan due to COVID-19 pandemic
Ms. ONO Shoko, Artistic Swimming volunteer, Indonesia

Japan Overseas Cooperation Volunteers were also severely restricted by the new coronavirus,
but they are providing continuous support with their ideas and passion.



指導の様子



競技歴4~5年の選手への直接指導



4年に一度の全国大会「PON」出場決定

氏名	小野祥子
派遣国	インドネシア共和国
派遣期間	2019年09月～2021年3月
分野	アーティスティックスイミング



退避後のオンライン指導

インドネシアのマカッサルでアーティスティックスイミングの州代表選手の指導を行っていました。彼女たちは4年に1度開催されるインドネシア最大の国内大会PON(ポン)でのメダル獲得を目指して日々練習しています。練習を通して伝え続けたことは「諦めないこと」です。練習を繰り返し、努力をしてできなかったことが出来るようになった時の彼女たちの笑顔は今でも鮮明に覚えています。そして徐々にチーム内でも年上の選手が年下の選手のプライベート練習に付き合い、教えてあげるといった助け合いも生まれるようになりました。

新型コロナウイルスの世界的な蔓延もあり、活動期間を残して2020年3月に日本に一時帰国。いつ戻れるか、このまま活動を終えるのか、先が見えない状況でしたが、2020年4月より現地のコーチと相談の上、日本からのオンライントレーニングを開始しました。大会の延期などもありましたが、選手たちがとても前向きにとらえていることが印象深かったです。改めて彼女達から物事を色々な視点で見ることの大切さを教えてもらいました。

オンライントレーニングでは、フィジカルトレーニングに加え、今だからこそできることを体験してもらおうと、他国の選手達との合同トレーニングセッションやチームビルディング、メイクアップ、デザイン、栄養についてセッションを設け、ゲストを招いて学ぶなど選手の興味のあることをチームとして取り組む時間を設けました。

現在はJICAの青年海外協力隊事務局で、体育・スポーツや幼児教育分野の案件作りのお手伝いや選考にかかわる業務のサポートを行っています。今までと異なる視点で国際協力×スポーツに携わることが出来、様々な気づきを得ています。



企画展示

8

スポーツに関する 研修員受け入れ事業

体育(学校体育)や障害者支援、近年ではスポーツを通じた地域振興や生活習慣病予防といった研修も行われています。

Development of Mentally and Physically Healthy Human Resources

JICA provides Acceptance of Technical Training Participants in physical education (school physical education), support for the handicapped, and in recent years, regional development through sports and prevention of lifestyle-related diseases.



学校体育日本国内研修の様子



ブラインドサッカーを初体験



健康づくりのための運動実技講習の様子



アクションプラン検討会の様子

「生活習慣病予防対策」コース(課題別研修)

世界の保健省の関係者が約5週間の研修に参加し、日本の生活習慣病対策への取り組みを学びます。研修員は研修の最初に健康チェックを受け、自らの健康度を確認、研修期間中は運動や栄養指導など健康づくりプログラムを体験して積極的に健康的な生活を送ります。その後、研修の前後の数値を比較し、どれだけ健康的になれたかを体感します。日常生活に注意を払うことで、より健康的になれること、そして生活習慣病予防につながることを研修員に示すことができます。

「学校体育」コース(課題別研修)

研修員は、教員養成校の指導者や体育教育を担当する行政官で、各国における学校体育の普及改善を目指し、日本式の体育科教育の理念や指導方法、見学や講義、実習を通じて学びます。日本の体育科教育では、運動技能だけでなく、社会性や協調性、健康や衛生に関する知識も深められるよう工夫がなされています。研修員が母国で抱える課題は多種多様ですが、それぞれの国の学校に、より良い「学校体育」を伝えられるよう、日本の経験を活かし理論と実践の両面から研修を実施します。

世界では年々高齢化が進み、また、世界の死者数に占めるがんや糖尿病、心臓疾患などの非感染性疾患(NCDs)による死者の割合も年々増加しています。これらの状況は開発途上国でも例外ではなく、高齢者の体力維持・増進や生活習慣病の予防・改善に向けて幅広い世代が運動できる機会を提供することが必要とされています。



企画展示

9

運動の楽しさを皆で共有するUNDOKAI | **高橋旺子**さん | 体育隊員

体育の授業がない学校も多いアフリカで「UNDOKAI」を開催、
運動の楽しさを学校や地域と分かち合うことで、体育を根付かせるきっかけを作ります。

Development of Mentally and Physically Healthy Human Resources

UNDOKAI: Sharing the fun of Gymnastics

Ms. TAKAHASHI Akiko, Physical Education volunteer, Senegal

In Africa, where many schools do not have physical education classes, the "UNDOKAI" event was held to create an opportunity for physical education to take root by sharing the fun of physical activity with schools and communities.



競技「台風目」に取り組む4年生たち



子供たちに声援を送る保護者たち



得点係の子どもたち

氏名	高橋旺子
派遣国	セネガル共和国
派遣期間	2017年7月～2019年7月
分野	体育



日本の学校体育
戦前から貧富の差に関わらずすべての人々にスポーツへのアクセスを可能とした日本の学校体育は、日本ならではの強みです。学校体育は、体力向上や健康増進のみならず、自己肯定感や自発性、協調性などの養成を通じて開発途上国の開発を担う次世代の人間開発に貢献しています。

小学校では体育の授業はほとんど行われていないセネガルに、学校体育の普及活動を行うために派遣されました。私の活動していたティエス市の小学校でも、他の学校と同様に体育の授業はありませんでした。

私は、運動の楽しさ、体育の楽しさを学校全体で共有し、その後の体育の恒常的な実施につなげたいという思いから、日本ならではの体育行事「運動会」“UNDOKAI”の実施を企画をしました。

UNDOKAIは、行事がほとんどないセネガルの学校にとっては一大イベントとなりましたが、学校で一つのことに取り組むことで、先生同士のつながりや学校と地域のつながりが深まり、子どもたちは道具の出し入れや得点の集計、審判のサポートを任せることで、主体性を育む機会にもなりました。

また、UNDOKAIに向けて授業をしていく中で、ルールを守って運動をすることができるようになり、運動中の応援や仲間同士の声かけの様子が変わって来ました。個人プレーでどうにかしようとしていた子どもたちは、うまくいかなくとも互

いに目が向くようになり、はじめは勝ちたいという気持ちが、仲間を責める、相手の失敗を笑う、という姿に現れていましたが、だんだん同じチーム内での会話が増えて、上手な子がアドバイスをしたり、事前に作戦を立てたりする姿が見られるようになるなど、多くの変化をもたらしました。

UNDOKAIは学校全体、そして地域の人も巻き込んで、運動を楽しむ日となりました。

セネガルでのUNDOKAIは全国に広がり、現在では各地で10回ほど行われています。国や話す言語が違って、スポーツを楽しむ心は誰もが持っている、人と人をつなぎ成長できるきっかけになると信じています。



企画展示

10

難民キャンプでのスポーツ教室開催 | **佐野太一**さん | 卓球隊員

難民キャンプでのスポーツ教室で見た子どもたちの笑顔。
スポーツへの参加は、様々な理由で社会参加の機会が限られている人々にとって、心の癒しや精神的な支えとなります。

Promotion of Social Inclusion and Peace

Holding a sports workshop in the refugee camp
Mr. SANO Taichi, Table Tennis volunteer, Ethiopia

Children's smiles at a sport workshop held in the refugee camp of South Sudan tells that participation in sports can be a source of spiritual support for people who have limited opportunities to participate in society for various reasons.



南スーダンの難民キャンプ内で実施したスポーツ教室の様子。まずはボールを作るところから



訪問したエチオピアの地域の卓球クラブの様子



エチオピアの活動先の教え子たちと共に

氏名	佐野太一
派遣国	エチオピア連邦民主共和国
派遣期間	2017年7月～2019年7月
分野	卓球



南スーダンの難民キャンプの小学校訪問

エチオピアの首都アディスアババにある国立のスポーツ学校で、卓球の技術指導と普及を行っていました。普段は、スポーツ学校や地域の卓球クラブを訪問指導していたのですが、卓球クラブでは、少ないラケットを皆で分け合い、1台の卓球台を10人でシェアしながら練習するなど、工夫しながら活動を行っていました。

ある時、国連開発計画(UNDP)とJICAエチオピア事務所が共同企画で実施した平和教育プログラムにて、エチオピア西部の南スーダン難民キャンプを訪れる機会があり、スポーツに触れる機会が少ない難民の子どもたちへ、スポーツ教室を開きました。難民キャンプを訪れるのは初めてだったので、訪問する前はイメージできませんでしたが、キャンプ内では子どもたちの元気な姿が見られました。しかし、母国から避難し、ここへたどり着いたことを考えると、子どもたちがこれまでどんな景色を見てきたのか、私には想像することもできませんでした。

現地にはボールやラケットはほとんどありませんでした。しかし、古紙と一緒に丸め、ガムテープで巻けばソフトボールの完成です。あとは、子供たちの思うよ

うに、キャッチボールをしたり、段ボールで作った的を狙うゲームをしたり・・・体を動かすことで自然と笑顔があふれました。

スポーツをするには確かに多くのモノが必要です。卓球でいえば、ラケット、ボール、卓球台、ネット・・・、場所も。さらに、卓球が上手くなるためには指導者も必要です。では、これらがそろっていないスポーツは「スポーツ」ではないのでしょうか。そんなことはありません。

私は、遠い異国の地で、これまでとは違う環境でのスポーツに触れた時、「スポーツ」の価値を改めて実感しました。



企画展示

11

南スーダン「国民結束の日」

JICAと南スーダン政府は「平和と社会的結束」のスローガンの下、
2016年から「国民結束の日」を開催しています。

Promotion of Social Inclusion and Peace
National Sports Event in National Unity Day, South Sudan

JICA and The Government of South Sudan have been holding
"National Unity Day" since 2016 under the slogan of "Peace and Social Unity".



100m走の予選を走る女子選手



地域の旗をもって応援するチームメイト



平和への想いを込めたメッセージと共に入場



南スーダン
首都:ジュバ



HIV/AIDSのワークショップの様子。選手は地元で啓発活動を行う



ウイニングランをする女子選手

2011年に世界一新しい国として誕生した南スーダンでは、独立後の国内の平和と安定を図る平和プロセスが進められています。スポーツを通じて国民の交流、民族間の融和を促進し、市民レベルで平和と社会的結束を後押しするべく、JICAは2016年の第1回大会から全国スポーツ大会「国民結束の日」の開催を継続して支援しています。

第4回目の国民結束の日の開会式と閉会式では、若きアスリートたちが平和への祈りや結束の必要性など、それぞれの思いを込めたメッセージボードを掲げて入場行進をしました。大会期間中には、全国から集まった民族背景の違う人たちが交流を深め、信頼を構築するとともに、地元コミュニティに戻った後に「平和の大使」として活躍できるように、平和構築ワークショップやジェンダー・HIV/AIDS関係の啓発活動を行いました。

選手からは、「スポーツを介してそれぞれの違いを忘れることができ、平和と結束のために共に学ぶことができた」、「民族・部族の違いに関係なく友だちを作れた経験を、地元に戻ってコミュニティで広めたい。それが南スーダンの平和に繋がると信じている」との声が聞かれました。それぞれの地元に戻って、スポーツを通じた平和構築活動を自ら進めたいとの声も多く、大会を通して、アスリートたちの平和と融和に向けた姿勢が育まれています。



企画展示

12

タンザニア

「Ladies First 女子陸上競技会」

女子も男子と同等の機会が与えられる社会の実現に向け、
タンザニア初の女性陸上競技会を開催しています。

Promotion of Social Inclusion and Peace
Ladies First Track and Field Meet, Tanzania

JICA supports to hold the first Women's Athletics Meet in Tanzania,
aiming to create a society in which women have the same opportunities as men.



10000m決勝で競い合うタンザニアの女子選手たち



女性の地位向上に向けたワークショップに参加する選手たち



タンザニア
首都:ドドマ



JICAタンザニア広報大使、往年の名ランナー ジュマ・イカンガー氏



ジェンダー平等への啓発活動として若年妊娠問題を考えるドラマの上演

タンザニアは、男女格差を表した「ジェンダー不平等指数」では、世界162カ国140位(2019年)となっており、ジェンダーによる格差の是正が課題となっています。スポーツにおいても、「スポーツは男性がするもの」という考え方が根強く、女性がスポーツに取り組む環境や機会は限られています。

「Ladies First」女子陸上競技会は、タンザニアにおいて、これまでトレーニングや大会への出場の機会が限られてきた女子陸上選手に光を当て、近い将来、国際大会で輝く原石の発掘また育成を目指して実施する事業です。JICAは同国代表としてロサンゼルスとソウルのオリンピックで入賞した元マラソン選手、ジュマ・イカンガーさん(JICAタンザニア事務所広報大使)と協力し、同事業をタンザニアでの初めての取り組みとして2017年から始めました。

第1回大会初日の2017年11月25日は、国連が定めた「女性に対する暴力撤廃国際日」。JICAは会場内で、NGOやJICAボランティアと協力し、若年妊娠の問題を取り上げる絵本の読み聞かせなどのサイドイベントも実施しま

した。この一連の取り組みから、競技会は、11月に東京で開催された女性が輝く社会づくりについて協議する国際女性会議WAW!(WAW! 2017)の公式サイドイベントとしても登録されました。

イカンガー氏は「タンザニアでは体育の授業といってもほとんどが講義。実技が少ないため、体育教育の推進に向けたJICAのサポートに期待しています」と語ります。本事業をきっかけとし、タンザニアにおけるジェンダー平等化及び女性のエンパワメント支援、スポーツ振興、体育教育の発展等に貢献することが期待されます。



企画展示

13

JICA海外協力隊経験者によるプロジェクト 「A-GOAL」プロジェクト (Africa-Global Assist with Local Sport Clubs)

アフリカと日本の人々がともに手を取り合い、誰もが生きやすい社会を築くために、アフリカ地域のスポーツクラブを中継地(ハブ)とする社会課題解決プロジェクトが進行しています。

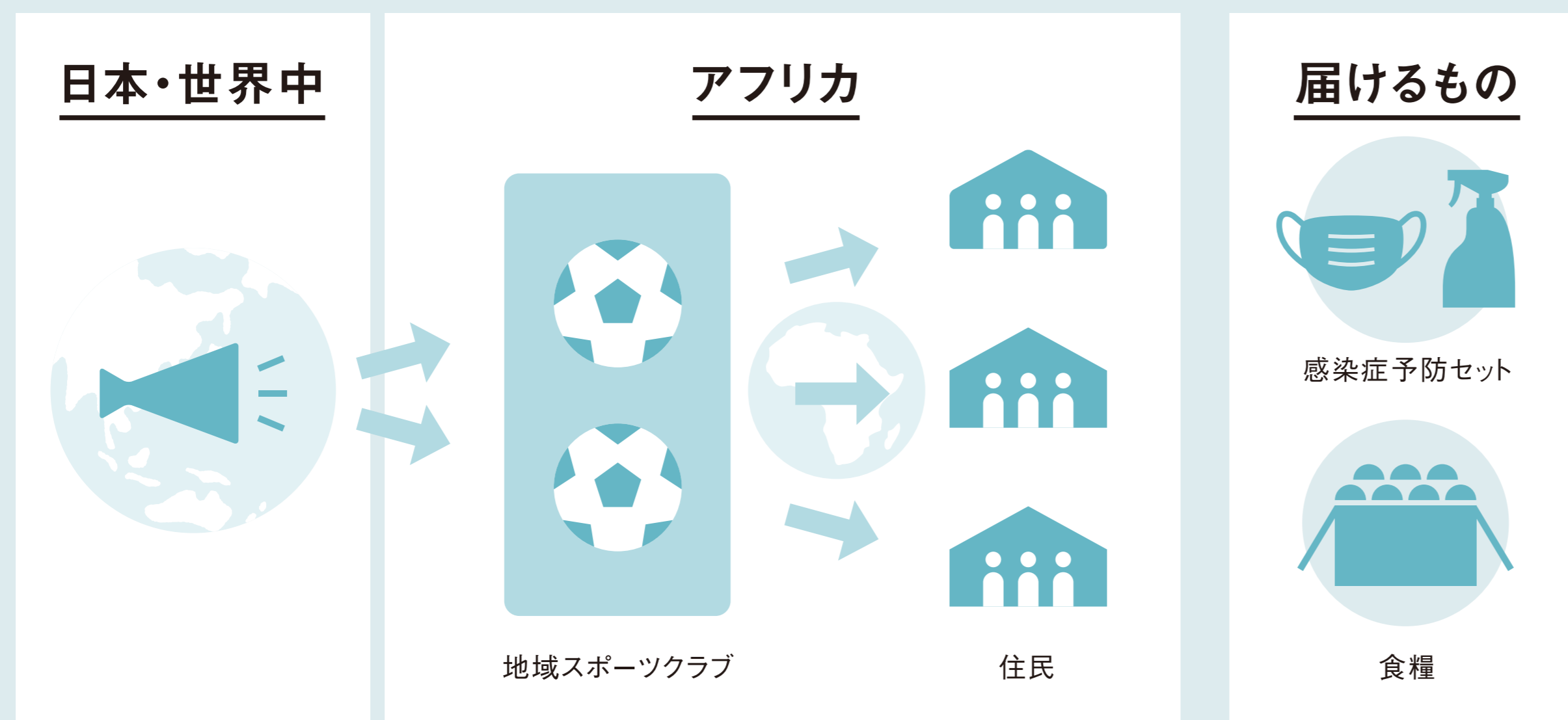
A-GOAL Project, Africa-Global Assist with Local Sport Clubs, by former JICA Volunteers

The people in Africa and Japan are working together through local sports clubs to solve social issues in Africa.

A-GOALプロジェクト概要図

A-GOALプロジェクトとは

A-GOAL～地域スポーツクラブを「ハブ」としたコロナ対策支援～



地域スポーツクラブの活動

地域の社会課題を解決するための活動を日常的に実施



子どもの居場所



ドラッグや犯罪防止



スポーツ指導



教育機会の提供



清掃活動



地域スポーツクラブをハブに支援を実施しています



活動中の岸さん



ナイジェリア

首都:アブジャ

ケニア

首都:ナイロビ

マラウイ

首都:リロングウェ

A-GOALのロゴ

アフリカと日本の人々がともに手を取り合い、誰もが生きやすい社会を築いていきたいという意図が込められている。



元JICA海外協力隊の岸卓巨さん(ケニア・青少年活動)が立ち上げたA-GOALプロジェクトは、新型コロナウイルス感染拡大の影響により生活に困窮するアフリカの住民に、スポーツクラブを中継地(ハブ)として食料等を届けるプロジェクトです。

「新型コロナには感染しなくても、飢餓で亡くなるかもしれない」というケニアの仲間からのSOSを受け、地域のスポーツクラブが、「地域づくり」の重要なアクターになっていることを自身の協力隊の経験から知っていた岸さんは、友人ら20名と共に食料支援のプロジェクトをすぐに開始しました。地域の事情に精通している現地のスポーツクラブを通して支援をすれば、政府などの支援が届きにくい人々にも迅速に必要な物資を届けることができると考えたのです。

この1年でケニア・マラウイ・ナイジェリアの合計22クラブを支援、受益者数は1万人を越えました。現在は、食糧支援や衛生用品の支援に加えて、生理用品の配布、学校に通う子どもたちへのマスクの提供、マラウイでは現地

のクラブを拠点とした野菜栽培の活動も行われています。更に、地域の社会課題を解決するためのスモールビジネスを、現地の人とともに進める「プロジェクトサポート」の活動も進行、栽培した野菜を使ったレストランの開業など現地の指導者たちから様々なアイデアが挙がっています。

「支援者」と「被支援者」として捉えられやすい日本とアフリカの関係は、A-GOALの活動を通して、ともに社会課題を解決するための「パートナー」に変化しています。そして、A-GOALの活動も物資配布といった「緊急支援」から、より「持続的な活動」へと変化し、「スポーツの力」で、誰一人取り残さない社会の実現にむけて邁進しています。



企画展示

14

行政のホストタウン取り組み

神奈川県と山梨県ではホストタウンとして文化・芸術、経済、教育などさまざまな分野において交流を深めています。

The Government host town initiatives

As a host town, Kanagawa and Yamanashi Prefectures are deepening exchanges in various fields such as culture, art, economics and education.

ホストタウンとは

事前キャンプは、各国・各地域のアスリートのコンディション調整や時差の解消、気候への順応等、様々な目的をもって大会前に任意に行うトレーニングです。自国はもとより、開催都市や開催国内、近隣国等、様々な場所で実施されます。一方ホストタウンとは、オリンピック・パラリンピック競技大会開催に向け、全国の自治体と参加国・地域との人的・経済的・文化的な相互交流を図るとともに、スポーツ立国、共生社会の実現、グローバル化の推進、地域の活性化、観光振興等に資することを目的としています。

直接の交流ができない中でも、SNS等を通じて相手国・地域の選手団等とお互いを励まし合うといった交流が行われており、オンライン交流も活発に行われています。また、選手を応援しようと相手国・地域の言語、文化、料理、国歌などを学び、東京大会での選手の受入れの準備が進められています。受入れを行うホストタウンが新型コロナウイルス感染症対策を行うことが求められますが、一方で、コロナ禍においても選手等と住民の交流が十分行えるようにしていくことが重要です。(出典:首相官邸ホームページ)

神奈川県のホストタウン (2021年5月現在)

市区町村名	相手国・地域
神奈川県・藤沢市	ポルトガル・エルサルバドル・エジプト
神奈川県・小田原市・大磯町・箱根町	エリトリア、ブータン、ミャンマー
横浜市	英国、チュニジア、イスラエル、ベナン、ボツワナ、コートジボワール、モロッコブルガリア、アルジェリア
川崎市	英国
相模原市	ブラジル、カナダ
横須賀市	イスラエル
神奈川県・横須賀市	リトアニア
鎌倉市	フランス
小田原市	モルディブ・オーストラリア
茅ヶ崎市	北マケドニア
逗子市	スペイン
厚木市	ニュージーランド
葉山町	英国

山梨県のホストタウン (2021年5月現在)

市区町村名	相手国・地域
甲府市	フランス
富士吉田市	米国
富士吉田市・山梨県	フランス
山梨市	ドイツ、キルギス
大月市	ネパール
北杜市	フランス
笛吹市	タイ
甲州市	フランス
都留市	フランス
西桂市	フランス
忍野市	フランス
山中湖村	フランス
富士河口湖町・鳴沢村	フランス
小菅村	パレスチナ

神奈川県の事前キャンプ地 (2021年5月現在)

締結団体	相手国
神奈川県・小田原市・箱根町・大磯町・星槎グループ	エリトリア(オリンピック)
横浜市、川崎市、慶應義塾大学、日本オリンピック委員会	英国(オリンピック)
神奈川県、平塚市	リトアニア(オリンピック)
神奈川県、小田原市、箱根町、大磯町、星槎グループ	ブータン(オリンピック)
相模原市、日本オリンピック委員会	ブラジル(オリンピック)
葉山町、大同生命保険株式会社	英国(セーリング)
小田原市	モルディブ(オリンピック)
神奈川県、相模原市、日本ボート協会	カナダ(オリンピック・ボート)
鎌倉市	フランス(セーリング)
神奈川県、小田原市、箱根町、大磯町、星槎グループ	ミャンマー(オリンピック)
横浜市、川崎市、慶應義塾大学	英国(パラリンピック)
神奈川県、平塚市	リトアニア(パラリンピック)
小田原市、ヒルトン小田原リゾート&スパ	オーストラリア(7人制ラグビー)
逗子市、株式会社リビエラ	スペイン(セーリング)
厚木市	ニュージーランド(バスケットボール・ゴルフ・サッカー・車いすラグビー)
横須賀市	イスラエル(オリンピック・柔道)
神奈川県、藤沢市	ポルトガル(パラリンピック)・エルサルバドル(オリンピック)・エジプト(フェンシング)

山梨県の事前キャンプ地 (2021年5月現在)

市区町村名	国・競技
甲府市	フランス共和国・卓球/レスリング
富士吉田市	フランス共和国・7人制ラグビー
山梨市	ドイツ連邦共和国・ウエイトリフティング、キルギス共和国・パワーリフティング
北杜市	フランス共和国・ビーチバレーボール/BMX
甲州市	フランス共和国・ハンドボール
西桂町	フランス共和国・フェンシング
忍野村	フランス共和国・バスケットボール
山中湖村	フランス共和国・自転車競技ロードレース
富士河口湖町・鳴沢村	フランス共和国・トライアスロン

都筑区のホストタウン交流

横浜市都筑区では、ボツワナの小学生との絵画交流を通して友好を深め、ホストタウンとして登録する大きな力となりました。今後も継続して子供たちの交流を通して国際親善を進めていきます。



ボツワナのベン・テマ小学校の様子



ボツワナについて国際理解教育を実施

16 平和と公正をすべての人に



17 パートナリシップで目標を達成しよう



企画展示

15

スポーツとSDGs えすでい-じーず

SDGsの目標である「だれひとり誰一人取り残さない」の実現に
だれ誰もが参加できるスポーツの力を役立てることができます。

Sports and the SDGs

We can make use of the power of sports, where everyone can participate, to achieve the SDGs goal of "no one will be left behind".

SDGsの17ゴールの達成に向けて、課題解決のツールとしてのスポーツへの期待が高まっています。特に、「スポーツと開発」によるSDGsの達成への大きな貢献が期待できるものが数多くあります。

スポーツは、子どもから高齢者、障がいのある人も、誰もが参加できる活動であり、SDGsの誓いである地球上の「誰一人取り残さない(No one will be left behind)」の実現にスポーツの力を役立てることができます。

3 すべての人に健康と福祉を



SDGsゴール
あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進する

関連取組

- ・ 学校体育の普及
- ・ 幅広い年代への運動機会の提供

4 質の高い教育をみんなに



SDGsゴール
すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する

関連取組

- ・ 学校体育の普及
- ・ 幅広い年代に対するスポーツを通じた学びの場や機会の提供

5 ジェンダー平等を実現しよう



SDGsゴール
ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワメントを図る

関連取組

- ・ 女性のスポーツ機会の確保

10 人や国の不平等をなくそう



SDGsゴール
国内および国家間の不平等を是正する

関連取組

- ・ スポーツ環境の整備
- ・ 学校体育の普及

16 平和と公正をすべての人に



SDGsゴール
持続可能な開発に向けて平和で包摂的な社会を推進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供するとともに、あらゆるレベルにおいて効果的で責任ある包摂的な制度を構築する

関連取組

- ・ 相互理解を促進する場や機会(大会、交流プログラム等)の創出
- ・ 国家の統一や民族融和の象徴となるアスリート(ロールモデル)の育成

17 パートナーシップで目標を達成しよう



SDGsゴール
持続可能な開発に向けて実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する

関連取組

- ・ スポーツへのアクセス向上
- ・ 多種多様な外部団体との連携